九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ダルマキールティの聖典観 : 『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳 (1)

大前, 太

https://doi.org/10.15017/2328539

出版情報 : 哲學年報. 47, pp.15-36, 1988-02-29. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

ダルマキールティの聖典観[1)]

——『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳（1）——

大前　太

序

ダルマキールティ(Dharmakīrti)は『プラマーナ・ヴァールティカ(Pramāṇavārttika)』第1章（推理論）第224偈以下において，ヴェーダ聖典の権威をめぐって，主としてミーマーンサー学派を相手に論議応酬を繰り広げている。ミーマーンサー学派は，ヴェーダ聖典の権威を根拠づけるために，ヴェーダ聖典の非人為性や恒常性を主張する。それに対して，ダルマキールティは，ヴェーダ聖典の権威を否定する仏教論理学派の立場から批判を加えている。そこには，ダルマキールティの聖典観あるいは言語観といったものが反映されている。また，仏教論理学派とミーマーンサー学派の交渉を知るという観点からも，その重要性が窺い知られる。そこで，以下，『プラマーナ・ヴァールティカ』の当該箇所をダルマキールティ自身の註(Svavṛtti)とともに和訳することとしたい。

和訳にあたっては，R. Gnoli 校訂本を底本とし，D. Malvaniya 校訂本も参照した(偈の番号は前者に依った)。本文の解釈に際しては，シャークャマティ（Śākyamati）およびカルナカゴーミン（Karṇakagomin）の註釈を参照した。両者の間で解釈の相違する箇所も見られるが，必要と思われるもののみ註記した。

目　　次

I．語の非人為性と真実性（第 224 偈—第 230 偈）
1.　ミーマーンサー学派の主張（第 224 偈）
2.　ダルマキールティの反論（1）（第 225 偈）
3.　　〃　　（2）（第 226 偈—第 227 偈）
4.　　〃　　（3）（第 228 偈—第 229 偈）
5.　総括　　（第 230 偈）
II．語と対象の関係（第 231 偈—第 235 偈）
1.　問題提起
2.　関係の恒常性に対する批判（1）（第 231 偈）
3.　　〃　　（2）（第 232 偈）
4.　　〃　　（3）（第 233 偈—235 偈）
（未　完）

和　　訳

I

1.　(G. 112, 6 ; M. 74, 22)「人間に依拠する言明は聖教（āgama）であってはならない。なぜなら，［聖教の］作者は知り難いからである[2]。

「語の虚偽性の原因である［貪欲等の］諸悪徳は人間に依拠するから，非人為的な(apauruṣeya)［言明］は真実の対象をもつ。」とある者たち［＝ミーマーンサー学派の者たち[3]］は言う。［第 224 偈］

実に，まさにすべての聖教が人を欺く可能性をもつのではない。人を欺く原因である［貪欲等の］諸悪徳は人間に依拠するから，非人為的な［言明］は真実の対象をもつ。」とある者たち［＝ミーマーンサー学派の者たち］は言う。なぜなら，原因の非存在は結果の非存在を成立させるからである。

2. (G. 112, 12 ; M. 74, 27) このように主張するその彼等［ミーマーンサー学派の者たち］に対して，

> 「語の真実性の原因である[4]［慈悲等の］諸美徳は人間に依拠するから，非人為的な［言明は］虚偽の対象をもつ，ということにどうしてならないのか。」と他の者たち[5]は言う。[6]［第225偈］

[7]貪欲等に覆われた人間は虚偽を語る，ということが経験的に知られているのと同様に，慈悲という美徳等をもった者は真実を語る［ということも経験的に知られている］。それゆえに，人間に依拠するから言明が虚偽の対象をもつのと同様に，［言明が］真実の対象をもつのも［それが人間に依拠するからである］。したがって，彼［＝人間］が排除されれば，［語が真実の対象をもつことだけでなく，］それ［＝虚偽の対象をもつこと］も排除される。それゆえに，［非人為的な言明は］対象をもたないことになるであろう。[8]あるいはまた，［真実の対象をもつことの］反対［すなわち虚偽の対象をもつこと］となるであろう。

実に，語は本性的に対象をもつのではない。なぜなら，協約(saṃketa)を介して，［人は］それ［＝語］にもとづいて対象を理解するからである。たとえば身体による合図[9]等のように。そうではなく，逸脱しないこと［すなわち協約されたとおりに機能すること[10]］が［語の］適合性（yogyatā）である。なぜなら，協約［時］における彼［＝人間すなわち協約の作者[11]］の意図に従って，［語が］がつくりだされるからである。［また，語がある特定の対象に対

して］本来的に確定しているのであれば，［人間の］意図にしたがって［対象を］表示するということはありえないからである。それら［＝語］は，［本来的には］対象をもたないのであって，人間が手を加えること（puruṣasaṃskāra）［すなわち人間が協約を定めること[12]］によって［はじめて］，対象をもつものとなりうるのである。そして，彼［＝人間］が手を加えることこそが，これら［＝語］の人為性（pauruṣeyatva）であるというのが理にかなっており，［人間から］生起することが［語の人為性であるの］ではない。なぜなら，それ［＝協約］によってはじめて，［語は］対象に対して［人を］欺くからである。［語は，］たとえ［人間から］生起したとしても，別の仕方で［すなわちありのままに[13]］協約された場合には，［人を］欺かない。それ［＝語］以外の人間の属性［たとえば眼を開けること・眼を閉じること等[14]］がそうであるように。したがって，この者［＝人間］が排除されれば，自ら定めた協約にもとづいて生起する対象認識が排除される。それゆえに，どうして，彼［＝人間］が排除されることによって，［語が］真実の対象をもつのか。

3. （G. 112, 27; M. 75, 7）また，もし，［人間から］生起することこそが［語の］人為性であって，協約を宣すること［すなわち協約を定めること[15]］が［語の人為性であるの］ではないとすれば。

> 実に，［語が］対象を表示するための基因である協約は人間に依拠する。［したがって，］語は，たとえ［それが］非人為的なものであると［仮定］しても，これ［＝協約］によって虚偽となりうる。［第 226 偈］

実に，これ［＝言明］が非人為的であると［仮定］してどのような効用があるのか。すなわち，［人は］協約にもとづいて対象を理解するのであるが，それ［＝協約］は，人為的なものであるので，虚偽ともなりうるのである。［たとえば，人は］戒（śīla）によって達成される“天界（svarga）”という

かの言明を，別の仕方で協約を定めることによって虚偽となすであろう[16]。それゆえに，［言明が非人為的なものであると仮定しても，対象を］誤って明示することもありうるのであるから，［人為的な言明について指摘した，人を欺くという[17]］同じ過誤がある。

> ［語と対象の］関係が非人為的である［と仮定した］場合には，［協約を］知らない者が［対象を］理解することになろう。［第227偈ab］

［反論：］次のように言うかもしれない。「語というものは，［対象との］関係が［人間によって］決してつくられないものである。それら［＝語］は，対象に対して，人間によって［本性とは］異なった形に誤用されることはない。それゆえに［誤りがないから］，［人を欺くという[18]］過誤はない。」

［答：］［それでは，］今や，協約に何の用があるのか。そもそも［語と対象の］関係とは，［語にもとづく］対象認識のもとになるものである。［対象認識の基因である］そ［の関係］がもし非人為的なものであるならば，この者［＝人間］は，［語にもとづいて対象を認識する際に］協約を必要としないであろう［しかし，実際には，協約を必要とするのである］。あるいはまた，［対象］認識の基因でないものがどうして関係であるのか。

> 協約によってそれ［＝関係］が顕現する[19]のであれば，［協約とは］別個［に関係］を想定することは無益である。［第227偈cd］

実に，関係は，現に存在していても，顕現していなければ，［対象］認識の基因ではない。そして，協約がそれ［＝関係］を顕現させるのである。［しかし，］それでは，[20]それ［＝関係］は，［[21]他ならぬ協約にもとづいて，語による対象表示が］すでに成立しているところに近寄ってくるものであるのに，どうして，理由もなく助長されるのか。対象認識をもたらすというただこれ

だけが関係の機能であるではないか。それ［＝対象認識をもたらすこと］は他ならぬ協約によってすでになされているのである［から，関係は無用である］。

［反論：］「［対象を表示する］能力のない［語］に対して協約は適合しない。したがって，［対象を表示するための］適合性がそれ［＝語］の関係である。[22]」と言うならば。

［答：］それでは，どうして語が関係でありえようか[23]。そもそも，語の能力ある本質［こそ］が，［対象を表示する語の］適合性なのである。たとえば，結果をもたらす適合性［が原因の本質である］ように。[24] もしそれ［＝適合性］が［語とは］別個のものであるならば，どうして“語の（śabdasya）”という［語と適合性の］関係を述べる[25] ことができようか。

［反論：］「［語によって］適合性が補助される［から，“語の適合性（śabdasya yogyatā）”と呼ばれるのである[26]］。」と言うならば。

［答：］そうではない。なぜなら，恒常的なもの［＝適合性］は付加的なものが［付与されえ］ない（niratiśaya）からである。また，それ［＝補助］について［さらに別の補助を想定するならば］，過大に適用されることになり，［その結果，無限後退に陥ることになる。］したがって，補助は成立しないから［語と適合性の関係は決して成立しないの］である[27]。そして，適合性に対して［語が］自立的に能力をもつとすれば，対象そのものに対して［語が表示能力をもつということが］どうして許されないのか。

［問：］「それでは，どうして，協約が語と対象の関係[28] であるのか。」

［答：］人間において起こるからである[29]。混交しないもの（amiśra）やすでに完成しているもの（siddha）の間には，いかなる関係も存在しない。なぜなら，区別がないことになってしまうからである。また，［すでに完成しているものは，他を］必要としないからである[30]。

ある特定の対象［を伝達しようという］意欲[31] によって惹起される語は，“こ［の語］はこれ［＝意欲］から［生じたものである］。”ということを理解している者に対して，自己の基因［すなわち対象を伝達しようという意欲

[32]] に顕現している対象を明示する。したがって［意欲という[33]］知識の形態（buddhirūpa）と語の発現（vāgvijñapti）とは[34]，生起するものと生起させるものという関係にある。それゆえに，語にもとづいて［対象が］認識されるのは，［それらが因果性という］不可分の関係（avinābhāva）[35] にあるからである。［そして，］それ［＝不可分の関係］を宣するのが協約である。なぜなら，［語が対象を］表示する［ための基因である］関係がそれ［＝協約］によって確知されるからであり[36]，［そして，協約は，］関係を宣するものであるから［比喩的に“関係”とよばれる[37] の］である。しかし，それ［＝協約］自体が関係であるのではない。[38]

4. （G. 114, 3; M. 75, 29）あるいはまた，［語と対象の間に，上述の不可分の関係とは］全く別の恒常的な関係が存在するとしよう。［そして，］そ［の関係］によって，

> 語が一つの対象に対して定まるとすれば，［それ］以外の対象に対する認識［が協約を介して起こるということ］はないであろう。［第 228 偈 ab］

実に，［一つの対象に対して定まっている］かの関係によって，関係のない対象に対する認識［が起こるというの］は，理にかなっていない。なぜなら，それ［＝関係］が無益となってしまうからである。そして，［人間の］意図によって協約を定められたすべて［の語］が，すべて［の対象］を明示するということは，経験的に知られている。

> ［語が］多く［の対象］と結びつくとすれば，［望ましいものと］矛盾する［対象］を顕すことがありうる。［第 228 偈 cd］

経験的事実に矛盾があってはならないというわけで，もし，すべて［の語］

がすべて［の対象］を表示する［と考える］ならば，同様に，すべて［の事物］がすべて［の結果］をもたらすのではない［ということも，承認されねばならない］。なぜなら，因果性は混交しない［すなわち各々定まっている[39]］からである。その場合に，各々定まった［事物］を達成手段（sādhana）とする［ある特定の］望ましい事柄［たとえば天界］に関して，すべての目的（sādhya）の［各々の］達成手段（sādhana）に［表示者として］共通する語が[40]，［特定の目的を達成させる手段として[41]］意図された［対象］のみを顕すよう，協約の作者は定める，というこのことは何にもとづくのか。それ［＝語］は，［すべてを表示するものとして］無限定なのであって，［ある特定の対象に対する］限定は，人間［の協約］によって得られるのである。

その際に，

また，［語の］非人為性を想定することは無益である。［第 229 偈 ab］

“私は，［非人為的な語にもとづいて，］おそらく混交しない対象を知るであろう。”というわけで，混交の原因である人間が［語から］排除されているのである[42]。その場合に，ある種［の語すなわち人為的なものとみなされているもの］は，人間によって，ある特定［の意図された対象］に対して使用されるときに，混交するのであるが，それとまったく同じ種類［の語すなわち非人為的なものとみなされているものも］，すべて［の対象］に共通しており，彼等［人間］によって，［協約を介して］ある［特定の対象］に対して［意のままに］定められるのである。なぜなら，彼等は真実を知らないからである。[43]

［反論：］「ヴェーダ聖典の［語］は，本性的に［望ましい対象に対して］定まっている。」と言うならば。

［答：］［もしそうであるなら，ヴェーダ聖典は，対象を明示するために］教示を必要としないであろう。別の仕方で協約を定めることによって［別の

対象を］明示することはないであろう。また，解釈の相違はないであろう。そして，［ヴェーダ聖典に解釈の］相違がありうる場合には，［解釈者たちの］教示が望ましい［対象］に対して整合することはない。したがって［ヴェーダ聖典の］非人為性［を想定すること］は無益である。

また，［語と対象の関係を承認する者は，相互に］異なっている［語や対象］の関係を確立するための根拠を述べねばならない。［第229偈cd］

[44]実に，外的な対象は語の本質ではなく，語は［外的な］対象の［本質］ではない。［もしそうであれば，語と対象とは］本質を同じくするのであるから，たとえ様態の相違があっても，不可分の関係にあるであろうが。たとえば，つくられたものであること（kṛtakatva）と非恒常性（anityatva）がそうであるように[45]。[46] また，これらの語は，表現意欲（vivakṣā）から生起するものであれ，生起しないものであれ，表現意欲によって顕現するのではない。［また，外的な］対象に依拠するので［も］ない。それゆえに，どうして，今や［語と対象の関係が存在しないのに］，それ［＝外的な対象］に対して［語が］定まることによって成立するそれ［＝対象］の随伴［すなわち存在］を，［語が］確知させるであろうか。なぜなら，［あるものと］関係のないものは，それを確知させるものではないからである。

5. (G. 115, 3 ; M. 76, 19)

［ヴェーダ聖典の語は，］人間が手を加えられないのであるから，決して対象をもたないであろう。［人間が］手を加えるということを承認するならば，本義であるこれ［＝非人為性］は，象の水浴[47]となろう[48]。［第230偈］

というのが総括偈である。

II

1. (G. 115, 5; M, 76,22) さらにまた。語と対象の関係［が存在するとすれば，それ］は，恒常的なものであるか，あるいはまた非恒常的なものであるか［いずれかであろう］。［さらに関係が］非恒常的なものであるとすれば，［それは,］人間の意欲によって起こるか，あるいはまた［人間の意欲によって］起こらないか［いずれかであろう］。［そのうち，関係が］人間に依存しないとすれば，人間は，場所等［＝時間，様態[49]］が変わることによって，意のままに，それ［＝語］によって［対象を］伝達する，ということはないであろう。なぜなら，［対象を伝達しようという］意欲があっても，［人は，他に］依存しない［語を使用すること］は決してありえないからである。たとえば山がそうであるように。［関係が］恒常的なものであるとしても，同じこの過誤がある。なぜなら，それ［＝関係］の恒常的な本質が［場所等が変わることによって］変化することはありえないからである。以上のことは，［関係が］すべて［の対象］に［同時に］存在すると［仮定］しても，同じである。なぜなら，［語は,］望ましい［対象］に対して各々定まることがないからである。それゆえに，［語にもとづいて］特定［の望ましい対象］が認識されることはないであろう。したがって，先［に指摘した[50]］と同じように，過誤に陥ることになる。また，［関係が，人間の］意欲によって起こるとすれば，［それは,］非人為的なものである。したがって，［人を］欺くのではないかという懸念がある。

2. (G. 115, 12; M. 76, 27) さらにまた，

> 関係項［である対象］が非恒常的なものであるから，関係も恒常的なものではない。［第 231 偈 ab］

実に，関係は，他［すなわち関係項］を基体（āśraya）としてもつ。なぜなら，［関係が関係項に］依拠しない場合には，それら［2つの関係項］は関係項ではありえないからである。そして，［語と対象の関係の］その基体は非恒常的なものである。［したがって，］これ［＝基体］が滅すれば，［それに依拠する］関係も滅する。そうでなければ，［関係は基体に］依拠しないことになろう。それゆえに，［関係は］恒常的なものではない。

また，それ［＝関係］が［関係項に］“依拠（āśraya）する”，というのはどういう意味か，ということが述べられねばならない。なぜなら，恒常的な［ものである］関係は，補助されることがないからである。そして，補助しないものは基体（āśraya）ではない[51]。

［反論：］「［恒常的なものである］種（jāti）が［語の］表示対象であるから，［上述の］過誤は存在しない。」と言うならば。

［答：］そうではない。なぜなら，［語が］それ［＝種］を表示することに対する効用が存在しないからである，ということはすでに述べた[52]。そして，すべてにおいて種はありえないから，［種を表示することは］ありえない。［たとえば，“デーヴァダッタ（Devadatta）”等の］個物を任意に表示する［語］において［そうである］。また［語が］常に種を表示するとすれば，他の特殊（viśeṣa）を放棄して，［別の望ましい特殊に対して人が］行動を起こすことはありえないから［種を表示することがありえないの］である。それゆえに，［他のものと］肯定・否定関係にある（anvayavyatirekin）存在物（bhāva）が，［それの存在・非存在によって］存在するまた存在しないことが，［異なるものの間の］の関係である。

このゆえに，対象と語のそ［のような］関係は，人間が，知識によって形成したものである。［第231偈cd］

まさにそのような存在・非存在［すなわち対象の存在・非存在による語の

存在•非存在］に依拠することによって，［語と対象は，本来］混交してはいないのであるけれども，人間の言語活動の潜在印象(bhāvanā)［すなわち無始時以来の言語活動の反復[53]］によって，混交しているかのように［概念知において[54]］顕現するのである。したがって，［語や対象のような］存在物の混交［すなわち関係］は，人為的なものである。

さらにまた，基体［である表示対象］が滅することによって関係が滅する場合に，［その対象を表示する］かの語は，関係をもたないのであるから，もはや新たな［表示対象］と結びつかないであろう。また，生起を繰り返す存在物は関係項ではないであろう。なぜなら，［そのような存在物に］立脚した関係は存在しないからである。

3. (G. 116, 4 ; M. 77, 13) また，そ［のような生起を繰り返す対象］に関して，

> ［関係が，］他ならぬ［その］対象とともに生起するとすれば，［第 232 偈 a］

［すなわち，］と仮定すれば，

> 語において，本性が変化することは妥当ではない。［第 232 偈 abc］

［関係項である対象が滅する場合に，］語は，関係を失ってしまうので，［後に生じる］別の対象に対して不完全であり［すなわち関係を欠き[55]］，そして［それゆえに］，［後に生じる］対象は表示対象ではない，というようなことがあってはならない，というわけで，生起［を繰り返す］対象が関係をともなって生起するとすれば，その関係は，たとえ生起したとしても，語に対する［関係］ではないであろう。なぜなら，それ［＝語］は，本性上，それ［＝

後に生起する関係］とは結びついていないのであるから，本性が変わることなしに，そうなること［すなわち後に生起する関係と結びつくこと］はありえないからである。また，対象とともに生起する［関係］は，［語とは］別個のものによってすでに成立しており，補助をなさない語には依拠しないからである。また，それ［＝語］がそれ［＝関係］の生起に対する補助因であるとすれば，能力ある［語］は常に［関係を］生起させるという過誤に陥ることになる。なぜなら，［語は他の補助因を］必要としないからである。［その理由は，］恒常的なもの［である語］は，［他の補助因によって］補助されることがないからである。そして，［語に，前には関係を生起させる］能力がない［と考えて］も，［語には］後にも［そのような］能力はない。なぜなら，［関係を生起させる能力のない］本性が放棄されないからである。

［実在的な］関係について［指摘された］この［ような］過誤は，概念的な［関係］には存在しない。［第 232 偈 cd］

人間の潜在印象において顕現し，それ［＝潜在印象］に依拠するという特質をもった関係は，存在物の混交に依拠しない。それゆえに，この者［＝人間］は，恒常的なものについても，［関係をもたないというその］本性を変えることなく[56]，ある［事柄］にもとづいて[57]，自ら推定して，［“これはこれと結びついている。”と[58]］結びつけるであろう。したがって，それら［恒常的であるとみなされているもの］も同様［すなわち人間によって想定された関係をもつ[59]］であろう。そして，［その限りにおいて，それらは，］滅［すなわち関係をもたないという本性を失うこと］という属性をもたないのである。

4. (G. 116, 22 ; M. 77, 26)　「基体［である対象］が消滅することによって，［対象に］依拠する関係が消滅するから，それ［＝関係］は非恒常的なものである。」と述べた[60]，そのことについて，

［反論：］もし，「基体が消滅したとしても，［関係は］消滅しない。［関係は］恒常的なものであるから。種がそうであるように。」［と言うならば。］［答：］恒常的なものに対して，基体にいかなる能力があるのか。［もし能力があるのであれば，］それは，基体と承認されるのだが。［第 233 偈］

「種は，恒常的なものであり，しかも，［個物に］依拠するものである。また，基体とともに消滅することもない。」と［確かに］述べられている。しかし，恒常的なものに対する基体の能力を我々は見出さない。［もし，その能力が認められるのであれば，］それは基体［と承認されるの］であろうが。なぜなら，すでに形成されているものは，形成されるということがないからである。また，形成をなさない［基体］は依拠されないからである。

［反論：］「種や関係は，基体から顕現する，すなわち［基体によって］補助される。それゆえに，“依拠する”［と言われる］のである。」と言うならば。

［答：］

知識を生起させる補助因［たとえば燈火等］が集合することによって，［瓶等が］それ［＝自己を対象とする知識］を生起させることが可能になるのであるから，瓶等についても，他ならぬ生起が，道理を知る者たちによって，顕現とみなされているのである。［恒常的なものであるがゆえに］変異しない［種等］に［付与されるべき］特殊性がない［すなわち知識を生起させる能力が生起することがない[61]］場合に，自身を顕現させるものによって，いかなる事柄［すなわち補助］がなされるのか[62]。［もし，補助がなされるのであれば，］それら［種等］は，それら［種等を顕現させるもの］によって顕現するとみなされるのだが。［第 234 偈—第 235 偈］

質料因に依拠する補助因から，知識を生起させる能力をもった別の刹那が生起することこそが，瓶等が“顕現する”ということである。なぜなら，そうでなければ［すなわち燈火等の補助因から，瓶等が，知識を生起させるための適合性を得ないならば］，それら［燈火等の補助因］からの補助を必要とせずに，［瓶等が］知識を生起させるという過誤に陥ることになるからである。また，能力をもたらす［燈火等］が，［瓶等を］生起させるものであるからである。［その理由は，］それ［＝能力］はそれ［＝顕現するもの］の本質であるからである。また，［能力が顕現するものと］別個の事物であるとすれば，［瓶等の］存在物は［燈火等によって］補助されないという過誤に陥ることになるからである[63]。また，［燈火等によってもたらされる］能力［—瓶等とは別個のものである—］から［瓶等の］知識が生起するのであるから，［常に能力のみが把捉され，］瓶等は決して把捉されないということになってしまう［しかし，実際には瓶等は把捉されるのである］。したがって，［瓶等は］光を必要とせずに把捉されるという過誤に陥ることになるからである。［瓶等が光を］必要としないのは，［燈火等によって瓶］そのものが補助されるのではないからである。それゆえに，これら［瓶等の顕現するもの］が，自己を対象とする知識を生起させるために他のもの［＝燈火等］を必要とするときには，［それらは，］それ［＝他のもの］から特殊な本性［すなわち知識を生起させる能力をもった本性[64]］を獲得するのである。それゆえに，これ［＝燈火等］にとって，それら［＝顕現するもの］は生起するもの［に他ならない］。しかし，［燈火等から，］認識されるものという本質が得られるのであるから，知識［という観点］から，特定の結果を表示する［“顕現するもの”という］語によって，［それ以外のものとの］区別を明らかにするために，［それらは］“顕現するもの”と呼ばれるのである。種や関係等は，決して補助されないのであるから，［それらが］補助をなさない［基本］によってこのように顕現する，というのは理にかなっていない。［未完］

略号および使用テキスト

［プラマーナ・ヴァルティカ原典］

G　: R. Gnoli 校訂本

R. Gnoli, *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the First Chapter with the Autocommentary,* Serie Orientale Roma XXIII, Roma, 1960.

M　: D. Malvaniya 校訂本

D. Malvaniya, *Svārthānumāna-Pariccheda by Dharmakīrti,* Hindu Vishvavidyalaya Nepal Rajya Sanskrit Series, Vol. II, Varanasi, 1959.

T　: Tibet 訳

Pramāṇavārttikavṛtti, 北京版 No. 5717 (Ce. 404b^{4}-535a^{3})；デルゲ版 No. 4216 (Ce. 261b^{1}-365a^{7}) .

［註釈］

Ś　: Śākyamati の註釈 (Tibet 訳のみ)

Pramāṇavārttikaṭīkā, 北京版 No. 5718 (Je. la^{1}-402a^{8}, Ñe. la^{1}-348a^{8})；デルゲ版 (Je. 1b^{1}-328a^{7}, Ñe. 1b^{1}-282a^{7}) .

K　: Karṇakagomin の註釈

Karṇakagomin's Commentary on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti, ed. by Rāhula Sāmkṛtyāyana, Allahabad, 1943, Reprint, Kyoto, 1982.

［その他のテキスト］

TBV　: Tattvabodhavidhāyinī

Saṃmatitarkaprakaraṇam by Siddhasena Divākara with Abhayadevasūri's Commentary, Tattvabodhavidhāyinī, Amadabad, 1924-31, Reprint, Kyoto, 1984.

TS : Tattvasaṃgraha
Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Kamalashīla, Bauddha Bharati Series-1, 2, Varanasi, 1968.

TSP : Tattvasaṃgrahapañjikā
（TS の出版に含まれる）

NAVV : Nyāyāvatāravārttikavṛtti
Nyāyāvatāravārttika-Vṛtti of Śri Śānti Sūri, Singhi Jaina Series 20, Bombay, 1949.

NBhū : Nyāyabhūṣaṇa
Nyāyabhūṣaṇam, ed, by Svāmī Yogīndrānandaḥ, Varanasi, 1968.

NM : Nyāyamañjarī
Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa, Kashi Sanskrit Series, No. 106, Part I, 2nd ed. Varanasi, 1972.

PKM : Prameyakamalamārtaṇḍa
Prameyakamal Martand by Shri Prabha Chandra, ed. by Mahendra Kumar Shastri, Bombay, 1941.

PrPr : Prakīrṇaprakāśa.
（VP III の出版に含まれる）

PVin II : Pramāṇaviniścaya 第 2 章
Ernst Steinkellner, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, zweites Kapitel : Svārthānumānam, Teil I, Tibetische Text und Sanskrittexte,* Wien, 1973.

VP III : Vākyapadīya 第 3 章
Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentary of Halārāja, Kāṇḍa III, Part 1, ed, by K. A. Subrahmania lyer, Deccan

College Monograph Series 21, Poona, 1963.

ŚV : Ślokavārttika

The Mīmāṃsā-Śloka-Vārttika of Kumārila Bhaṭṭa, Chowkhamba Sanskrit Series, No. 3, Benares, 1898-1899.

SP : Sambandhaparīkṣā

Vādanyāyaprakaraṇa of Acharya Dharmakirtti with the Commentary Vipañchitārthā of Acharya Śāntarakṣita and Sambandhaparīkṣā with the Commentary of Acharya Prabhāchandra, Dharmakirtti Nibandhawali (2), Bauddha Bharati Series-8, Baranasi, 1972.

（Tibet 訳を引用するにあたっては，北京版を先に，デルゲ版を後に示した。）

註

1) ダルマキールティの聖典観に関して，最近，以下の論文が発表されている。
若原雄昭「アーガマの価値と全知者の存在証明—仏教論理学派に於る系譜—」(『佛教学研究』第 41 号，1985，pp. 52-78)
Tom J. F. Tillemans, "Dharmakīrti, Āryadeva and Dharmapāla on Scriptual Authority" (『廣島哲學会』第 38 集，1986，pp. 31-47)
秋本　勝「Āgama 論一考」(『印度學佛教學研究』第 35 巻第 2 号，1987，pp. 891-889)
Hideomi Yaita, "Dharmakīrti on the Authority of Buddhist Scritures (āgamas)" (『南都佛教』第 58 号，1987，pp. 1-7)

2) この直前の箇所のニャーヤ学派との対論において，ダルマキールティは，聖教の作者は知り難い，ということを述べている。これについては，若原前掲論文参照。

3) K. 404, 5-6 : kecit Mīmāṃsakā ācakṣate.

4) G. 112, 14 : satyārthahetūnāṃ ; M. 74, 28 : satyatvahetūnāṃ ; T. 481b[5], 324b[6] : bden pa ñid kyi rgyu. ここでは，M および T に従って，「真実性の原因」と訳した。

5) ダルマキールティ自身の見解である。K. 405, 26-27 : paramukhena Śāstrakāra evāha.

6) 以上の 2 つの偈と同様の偈が，NM. 154, 15-18 に見出される。また，同様の議論が，TS. kk. 2085ff., 2352ff. に見出される。TS に見られるヴェーダ聖典の非人為性批判については，拙稿「Tattvasaṃgraha における Vedāpauruṣeyatva (Veda 聖典の非

人為性）批判」（『印度學佛教學研究』第 34 巻第 2 号，1986，pp. 840-835）参照。

7) 以下と同様の文章が，Nbhū. 397, 17-19 および NAVV. 30, 18-21 に見出される。

8) Cf. Ś. 302b[4-5], 254a[6-7]; K. 407, 20-21.

9) K. 407, 24-25：「手の変形，眼を閉じること等が身体による合図である。」(hastavikārākṣinikocādayaḥ kāyasaṃjñā.)

10) K. 407, 27-28: yathāsaṃketaṃ pravṛttiḥ.

11) K. 407, 28: saṃketakartuḥ.

12) K. 408, 8-9: puruṣasaṃketāt.

13) K. 408, 13: mithyārthatāvirodhena yathābhāvam.

14) K. 408, 14-15: unmeṣanimeṣādiḥ.

15) K. 408, 26: saṃketakaraṇam.

16) 仏教徒によれば，天界(svarga)とは，須弥山の上方に存在し，人は戒によってそこに到達することができる。一方，ミーマーンサー学派によれば，svarga とは至福であり，祭式によって実現されるものである。Cf. K. 409, 10-12.

17) Cf. K. 409, 14-15.

18) K. 410, 13: visaṃvādalakṣaṇo doṣo nāsti.

19) ミーマーンサー学派のクマーリラによれば，すべての者が関係を理解しているのではなく，関係はそれ自身に関する知識を必要とする (ŚV, Saṃbandhākṣepaparihāra, k. 32)。関係に関する知識は，先人の言語行為を見聞きすることを通して得られる。これは，通常，vṛddhavyavahāra と呼ばれ，始まりのないものと考えられている。なお，文法学派のヘーラーラージャはヴァークヤ・パディーヤに対する註釈 (PrPr. 144, 25-145, 1 ad VP III, Saṃbandhasamuddeśa, k. 31) において，vṛddhavyavahāra は samaya と同義語である，と述べている。しかし，ダルマキールティの言う samaya とは，人間の定める社会的約束事であり，ミーマーンサー学派や文法学派の言う vṛddhavyavahāra とは内容を異にしている。

20) 以下と同様の文章が TSP. 864, 11-13 に見出される。

21) K. 410, 30: saṃketād evārthapratipādane siddhe sati.

22) 適合性(yogyatā)あるいは能力(śakti)が関係であるという見解は，クマーリラ(ŚV, Saṃbandhākṣepaparihāra, k. 28a) や文法学派のバルトリハリ (VP III, Saṃbandhasamuddeśa, kk. 29, 31) に見られる。

23) 語の適合性とは，語の本質，すなわち語そのものである。また，語は，関係項(saṃbandhin)である。したがって，語の適合性が関係であるとすれば，語という同一のものが関係でありかつ関係項である，ということになってしまう。Cf. Ś. 305b[3-4], 256b[2]; K. 411, 15-17.

24) PVin II. 18*, 30-31 に同様の文章が見出される。

25) 関係は属格によって表わされる。

26) K. 411, 24 : śabdajanyatvāc chabdasya yogyatety ucyata iti bhāvaḥ.

27) K. 411, 28-29 : tatrāpy upakāre yatoktavidhinā' parāparasyopakārasya kalpanāyām atiprasaṅgāt, tato 'navasthāyām upakārāsiddheḥ saiva yogyatayā saha śabdasya sambandhāsiddhiḥ.

28) G. 113, 23-24 : śabdhārthasaṃbandhāḥ を M. 75, 24 にしたがって，°saṃbandhaḥ に訂正。

29) K. 412, 13-14 :「“こ［の語］はこの対象を表示するものである。” と対象を宣することが協約である。そして，それ［＝協約］は，人間において起こるのであって，語と対象の間に起こるのではない。」(asyārthasyāyaṃ vācaka ity arthakathanaṃ samayaḥ, sa ca puruṣeṣu varttate na śabdārthayoḥ.)

30) ダルマキールティは，SP. kk. 1-6 において，実在物の間に想定される関係を，他に依存すること (pāratantrya) および本質の混交 (rūpaśleṣa) の 2 つに分け，各々に対する批判をおこなっている。清水 庸「Dharmakīrti の “Sambandhaparīkṣā” の和訳解説」(『佛教學研究』第 37 号，1981，pp. 23-31) 参照。

ここで，ダルマキールティは，実在物一相互に混交しないものであり，また，すでに成立しているものである一の間には，本質の混交や他に依存することといった関係の特質は存在しない，ということを述べているのである。Cf. K. 412, 15-21.

31) K. 412, 24-25 :「ある特定の対象，*すなわち伝達しようという意図によって対象とされているもの，それに対する意欲すなわち［それを］伝達しようという意欲」(arthaviśeṣo yaḥ pratipādanābhiprāyeṇa viṣayīkṛtaḥ, tasya samīhā pratipādanecchā.) *Ś. 307a^{3}, 257b$^{2-3}$:「話者の概念知に存在するもの」(smra ba poḥi rnam par rtogs paḥi blo la gnas pa.)

ダルマキールティは，第 213 偈および自註において，語と外的な対象との間には必然関係は存在せず，語は話者の表現意欲 (vivakṣā ; abhiprāya) を明示するにすぎない，と述べている。この場合に，表現意欲とは，語を発声しようというような単なる発声意欲 (vivakṣāmātra) を指すのではなく，ある具体的な内容をもった対象を相手に伝えようという意図を指す。このことについては，戸崎宏正「ダルモーッタラとシャーンタラクシタ一“語にもとずく知” をめぐって一」(『雲井昭善博士古稀記念 仏教と異宗教』，1985，pp. 273-284) 参照。

32) K. 412, 26 ; pratipādanābhiprāyaḥ. Cf. Ś. 307a^{4}, 257b^{3} : brjod par ḥdod pa.

33) K. 412, 28 : buddhirūpasyābhiprāyalakṣaṇasya.

34) G. 113, 27 : buddhirūpavāg vijñaptyor を M. 75, 26 に従って，buddhirūpavāgvijñaptyor に訂正。

35) ダルマキールティによれば，不可分の関係は，同一性および因果性という 2 種のみである。

36) カマラシーラは，TSP. 854, 13-15 において，次のように言う。語と表現意欲一般

(vivakṣāmātra) との因果関係は，知覚・無知覚 (pratyakṣa-anupalabdhi) によって確知されるけれども，語とある特定の対象との因果関係は，協約がなければ，確知されない。それを決定するために，協約が定められるのである。

37) K. 413, 7-8 : upacāreṇa samayasya sambandhākhyānāt sambandhavyapadeśaḥ.

38) これと同様の議論が，TS. kk. 2618-2622 に見出される。

39) K. 414, 28 : pratiniyatatvāt kāryakāraṇatāyāḥ.

40) K. 415, 9-10 : sarveṣāṃ sādhyānāṃ kāryāṇāṃ yathāsvaṃ yāni sādhanāni kāraṇāni teṣāṃ vācakatvena sādhāraṇasya tasya śabdasya. ここでは，K. に従って訳した。Ś. は以下の通りである。Ś. 308b$^{3-4}$, 258b$^{4-5}$: bsgrub par bya ba daṅ sgrub par byed pa thams cad kyi thun moṅ ste, bsgrub par bya ba ḥbras bu thams cad daṅ bdag ñid ji lta ba bshin du sgrub par byed paḥi rgyu raṅ gi mtshan ñid gaṅ yin pa de dag ni rjod par byed pa ñid du thun moṅ du gyur paḥo.

41) K. 415, 10 : viśiṣṭasādhyasādhakatvena. (テキストは，°sādhyakatvena.)

42) G. 114, 16 : puruṣopākīrṇaḥ を M. 76, 9 に従って，puruṣo 'pākīrṇaḥ に訂正。

43) 以上と同様の文章が，TSP. 863, 12-15 に見出される。

44) 以下，実在的な語と対象の間に，同一関係が成立しないということが述べられる。

45) 'つくられたものでないこと' と '非恒常性' とは，各々 'つくられたものからの排除' および '恒常的なものからの排除' を意味する。そして，これらは，同一物における異なる 2 つの様相—排除の相違にもとづく—であり，そこには同一関係が成立する。

46) 以下，同様に，因果関係が成立しないということが述べられる。

47) 象は，身体についた汚れを洗い流すために水浴をした後，再び土にまみれる。

48) この偈は，TBV. 11, 36-37 および PKM. 166, 8-9 に引用されている。

49) K. 417, 23 : ādiśabdāt kālāvasthāgrahaṇam.

50) 第 228 偈 cd，本訳稿 6 頁参照。

51) M. はこれを偈とみなしている。Cf. G. Introd. p. XXXII.

52) Ś. 313a$^{3-4}$, 262a$^{3-4}$ によれば，第 93 偈—第 94 偈 cd を指す。この箇所は，以下の諸論文に訳出されている。

Erich Frauwallner, "Beiträge zur Apohalehre, I, Dharmakīrti, Übersetzng" WZKM Bd. 39, 1932, S.274.

赤松明彦「ダルマキールティのアポーハ論」(『哲學研究』第五百四十五号，1980, p. 109)

P. R. Vora and Shinkai Ota, "A Translation of Pramāṇavārttika I and Svavṛtti —(3)" (『佐賀竜谷短期大学紀要』第 28 号，1982, pp. 16-17)

53) K. 420, 18-19 : anādikālīnavyavahārābhyāsataḥ.

54) K. 420, 18 : vikalpabuddhau pratibhāsete.

55) K. 421, 12 : sambandhavaikalyam.

56) K. 422, 13-14 : svabhāvam ātmīyam aparāvartayann asambandhisvabhāvaṃ

sthiram apanīya.

57) K. 422, 14-15：「それが存在する場合に何かあるものが存在することが見られる［という事実］にもとづいて，*あるいはまた，内的なそのような潜在印象が熟することによって。」(tadbhāve kasyacid bhāvadarśanāt, antastathābhūtavyavahāravāsanāparipākād vā.) *これは，シャークャマティの見解である。Cf. Ś. 315b[5], 264 a[3].

58) K. 422, 15 : idam iha *sambaddham iti. (*テキストは，sambandham.)

59) K. 422, 16 : puruṣopakalpitasambandhavantaḥ.

60) 第 231 偈 ab および自註，本訳稿 10-11 頁参照。

61) K. 423, 11 : jñanotpādanayogyatānutpattau.

62) K. 423, 11-12 : ko'rthaḥ ka upakāraḥ kṛtaḥ, naiva kaścit. G. 117, 4 : kutaḥ を M. 78, 8 および K. によって，kṛtaḥ に訂正。

63) K. 423, 24：「あるものがつくられた場合に，［それとは］別個のものが補助されるということはない。過大に適用されることになるからである。」(na hy anyasmin kṛte 'nya upakṛto bhavaty atiprasaṅgāt.)

64) K. 424, 13 : jñānajananayogyaṃ svarūpam.